

## 月の裏側

旭川市立忠和中学校 三年 佐藤 鞠衣

「月、月？」月というテーマについて考えていた。最初は「幸せな時も辛い時もお月様は私を支えていた」というエッセーを書こうと思つていた。だが、いざ書いてみると「なんか違う。」となるのだ。他にも書いてみた。違う。どれも違う。心の底から「これだ！」となるものがない。「私の書きたいエッセーとは?」「月と関係がある経験は何がある?」考えれば考えるほど脳が混乱してくる。そんな時、頭によぎるのは「月経」というワード。あまり考えたくない。女性の体である限り、仕方ないことはある。でも、私には「月経困難症」という病気がある。月経時の痛みがとてもひどかったり、吐き気や頭痛などの症状におそれ、日常生活に支障が出るという病気だ。人によって痛みや症状は異なると思うが、私は痛み止めを飲んでも飛び跳ねる程の痛みがはしる。母に痛みの症状の詳細を話したところ、陣痛が起きている人を見ているような痛みらしい。

病気になつたのは中一の夏休みが終わつた後だった。「子宮ら辺がとても痛い」それが最初だった。私は「思春期早発症」という他の人よりも早い段階で胸が大きくなつたり、月経が来てしまうなどの小児慢性特定疾患の病気のホルモン治療の効果がなくなり、小学五年生の大晦日に月経が来て、少し安心して中学にあがつた。平和な夏休みが終わつたと思っていたら起きた。私は頑張つて階段を降りてリビングにいる両親に相談した。学校を休み婦人科に連れて行つてもらつた。人生初の婦人科は妊娠という新たな生命がお腹に宿つているかで診てもらうのではなく、未成年の時に月経痛で診てもらうとはみじんも思つていなかつた。周りには大人しかいない。緊張により、私の心臓はずつと、どきどきしている。「佐藤鞠衣さん。」私は診察室に呼ばれた。今までになく緊張した。お医者さんに症状を話し、子宮の状態を見ることなつた。そこは小さな個人病院といふこともあり、大人と同じ機械でお尻に内診ということになつた。ああ、これが人生初の内診。痛かつた。検査の結果、素晴らしいことに子宮には異常はなかつた。そこで「月経困難症」とつけられた。安全性がある方の薬で治療になつた。その薬を飲んでから痛みは消えた。

中一の終わりぐらい。痛みが強くなつてしまい、医大の婦人科に行くことになつ

た。今まで飲んでいた薬が体に合わなくなつた可能性から、薬を強い物に変えることになった。血栓症などのリスクもあるその薬は避妊薬としても使われていた。でも、効かなかつた。痛いまま。子宮のエコーを見ても子宮には異常がない。思春期早発症で医大に通っていた為、婦人科と小児科で連携を取りながらの治療となつた。「腸の病気なのでは?」とも言われた。次第に学校にも部活にも行けなくなり、ご飯や水分を自分から取れなくなつた。点滴に通うようになつた。

今は薬を飲むのをやめ、痛みはほとんどなくなつた。痛みに耐えながら体育祭や部活のコンクールに出られなかつたりなど辛い思いをした。失うものもあつた。同学年の皆が楽しい時や嬉しい時、私はその時を共に過ごせないことに嫌気が差した。消えたかった。でも、心配のメールを送つてくれる友達や学校に行けた時、来たことに喜んでくれる友達など自分の為に動いてくれる優しい人達がいることに気がついた。辛い思いや痛い思いをしたからこそ前より人に寄り添えるようになつた。だから、痛みに耐えていた時の私に伝えたい。「痛くて心も体も限界だったのに、明日も頑張ろうと思つて生きててくれてありがとう。」